

# きょうだい児支援のあり方

—家族とともにある成長を支えるジョイジョイクラブの実践記録—

積永千明<sup>1</sup> 太田千裕<sup>2</sup> 神名昌子<sup>1</sup> 志賀文哉<sup>3</sup>

The Role of Support for Siblings of Children with Disabilities  
—The Practice Record of Joy Joy Club Providing Growth with their Families—

Chiaki SHAKUNAGA, Chihiro OHTA, Masako KANNA, Fumiya SHIGA

## 概要

本稿は、人間発達科学部授業「子どもとのふれあい体験」の「ジョイジョイクラブコース」の取り組みについて、2015～2017年度の3年間の実践を振り返り記すものである。当コースでは、障がいのある子（同胞）のきょうだい児の支援を行うものであるが、同胞や保護者との活動も含んでおり、大学外の支援者の支援によって成り立っている。それぞれのグループ活動には対象者に即した目的があり、年間を通じた活動により変化がもたらされる。授業では対象の1年間の変化や成長をみつつ次年の活動を考える。一方で、受講生らの履修は1年であり継続的な関わりが課題である。

キーワード：きょうだい児，寄り添う支援，家族への支援，外部支援

Keywords : siblings, close support, support for family, external assistance

## I. はじめに

人間発達科学部の1年次生を対象にした通年科目「子どもとのふれあい体験」の一つとして、障がいのある子（同胞）の「きょうだい児」を主な対象とした「ジョイジョイクラブ」コースは2014年度から人間発達科学部の授業科目として実施されてきた。

「ジョイジョイクラブ」は、当初より「富山市手をつなぐ育成会」や「富山パイロットクラブ」など大学外部の団体と連携により実施しており、イベントによって附属農場の関係者の協力も得てきた。学生の「子どもとのふれあい体験」を旨とする授業の中で、対象を児童期にあるきょうだい児とし、個々のきょうだい児にとってかけがえのない「時間・場所・関係」を提供するための取り組みを目指してきた。

大学1年次生はまだ専門的な学習が進んでいない段階であり、障がいのある子のきょうだい児を支えるということは難易度の高いことではないかという趣旨の指摘を受けることもある<sup>1</sup>。対象児とどうにかかわるのが望ましいかなど知識や理論に裏付けられた行動が十分にできる段階とはいえないものの、一方ではそうした知識等によって対象児を「型」に当てはめてみるのではなく、目の前にいる児に率直かつ自然にかかわり、その経験から学ぶことが可能になると考えられるのであり、当科目の他のコースにも共通した学習のねらいである。そうした挑戦的・意欲的な要素を含む実践の科目としてジョイ

ジョイクラブは手探りを重ねつつ実施してきた。

本稿は2015年度から2017年度の3年間について振り返り、その実践の要点を記録し、今後の活動および類例の活動の参考とすることを目的とする。なお、支援の実際の記録であるので、授業としての詳細や学生に対する教育内容の検討は本稿では含まない。

## II. ジョイジョイクラブ - 2015年度から2017年度の活動の内容

ジョイジョイクラブは表1に示す通り、きょうだい児との活動を軸に年間計画を立てるが、すべてがきょうだい児のみとの活動ではなく、「家族デー」と称する同胞や保護者との活動日も設けている。これは、きょうだい児が直面する課題の中で、家庭内では同胞と比べて「後回し」にされがちになることが挙げられる中、家族ごと活動に参加していただくことで、個別に注意を向けてもらったり、配慮してもらったりすると同時に、親との時間も得るための工夫の一端である。

きょうだい児を「ジョイピョン」、同胞を「ジョイケロ」、保護者を「ジョイワン」の3グループに分け、それぞれのグループでの活動時間とその前後に配置した全体での活動時間とで構成される。各活動日の導入は体育館や人間発達科学部校舎教室を基本とし、親子で体を動かすなどのプログラムを入れ、活動の後半にはクッキングを入れるのが一つのパターンである。個別の活動について、

<sup>1</sup> 富山県立しらとり支援学校 <sup>2</sup> 富山県立高岡支援学校 <sup>3</sup> 富山大学人間発達科学部

富山大学外の協力者（現職教員、民間団体等）による専門性を反映した活動や地域でのつながりを拡張する支援が活動のねらいには含まれている。

表1に示す通り、ジョイピョン（きょうだい児対象）の回数が多く、その実施日の中からジョイケロ（同胞対象）とジョイワン（保護者対象）の実施日を決める形になる。ジョイジョイクラブがきょうだい児を対象とした活動であることから、まずはきょうだい児のための「時間・場所・関係」を優先的に考え、日程とプログラムを練っていく。当初計画から変更される場合があるが、それは各グループの活動をそれぞれの時期に検討すること

に伴うものである。また当初計画は、当「ジョイジョイクラブ」コースを履修する学生が決定する4月下旬より前に検討し、学生の科目選択のため、また学外の参加家族を募るための資料でもあり、おおよその計画を把握するためのものである。

以下の通り、3つの活動の特徴を記し、2017年度のプログラムを示す。特徴は、「活動名」「主な対象者」「主な支援者」「平均的な人数」「プログラム内容」（実施日情報を含む）、2017年度のプログラムを示した上で、活動から得られた気づきや特記すべき事項を記した。

表1 2017年度ジョイジョイクラブ年間計画表（当初）

期日	場所	ジョイピョン	ジョイケロ	ジョイワン	学生
		(話題)			
◎6月3日(土) 12:00-17:30	富山大学	(自己紹介をしよう)			1,2年生 中心
7月29日(土) 12:00-17:30	富山大学	(みんなで遊ぼう)			
◎8月26日(土) 12:00-17:30	富山大学	(家族を紹介しよう)		講演会	
☆9月10日(日) 9:30-16:30	ファミリーパーク	パイロットウォークへの参加			1年生 中心
11月11日(土) 12:00-17:30	富山大学	(みんなで遊ぼう)			
◎12月10日(日) 12:00-17:30	障害者福祉プラザ	(お父さんお母さんに言いたいこと)			
1月20日(土) 12:00-17:30	富山大学	クッキングを楽しむ			
◎2月17日(土) 12:00-17:30	富山大学	(ぼくわたしの夢)			

注1：◎はきょうだい児とその家族を対象とした「家族 Day」、☆は午前中から活動する「1日 Day (10:00～16:00)」を示す。  
 注2：囲み表示は、大学外の関係者らとの協働で恒例化したプログラム若しくは特別企画である。定期的活動とは直接的に関連付けられていない場合がある。  
 注3：年間プログラムは「ジョイピョン」を中心に予定する。「ジョイケロ」「ジョイワン」の空欄部分は、各回のプログラムを決める直前の検討で確定する。

## II-1. きょうだい児対象

活動名：ジョイピョングループ

主な対象者：障害のある子のきょうだい児

主な支援者：釈永千明（県立しらとり支援学校 教諭）  
ほか 富山大学学生 約5名

平均的な人数：7家族から約5名

プログラム内容：障害のある子供のきょうだい児に対して、年間6回のプログラムを実施してきた。

内容は、自分の家族や友達など周りの人たちについて考えたり、その気持ちを表現したりするものである。それらの活動を通して、同じような感情をもっている仲間がいることに気付いたり、自分を肯定したりできるように配慮してきた。年間プログラム例について以下に示す。（表2）

実施結果：

<家族について>

自分の家族（同胞を含む）について、どのような人かを考え、発表するという活動を行った。数年間、続けて参加していたきょうだい児（以下A児）に、同胞について聞き取りながら活動していたところ、以前は同胞のことを「かわいい」と言っていたが、「うざい」などの否定的な発言が見られるようになった。詳しく話を聞き取ったところ、同胞も成長し、同胞が、自分のできることを増えたり、行動範囲、興味が広がったりしたことによって、A児のテリトリーに入り込んでくるようになったことを語ってくれた。また、A児自身も成長し、思春期が近づくにつれ、「自分の姉妹」への意識が変容したことによって、同胞への意識が変容していったのではないかと考えられる。

しかし、「うざい」と言っていたその表情は嫌悪のも

表2 ジョイピョン（きょうだい児対象）の年間活動（2017年度）

	実施日	目的	内容
第1回	2017年 6月3日（土）午後 （約2時間）	・ジョイピョンチームと一緒に活動する仲間について知る。	・音楽が止まったら、近くの人と自己紹介をして、名前が書かれたシールをもらい、シートに貼る。できるだけ多くの人と自己紹介をして、名前シールを集める。
第2回	2017年 7月29日（土）午後 （約2時間）	・自分の家族（同居）について考える機会をもつ。 ・自分の家族と友達の家族との違いや同じ部分があることに気付く。	・「お父さん」「お母さん」「きょうだい児（同胞を含めて複数人いる場合は、全員）」について、「名前」「得意なこと」「好きなところ」「ちょっと嫌なところ」などをそれぞれについて、ワークシートに記入する。 ・一人につき家族一名について発表する。
第3回	2017年 8月26日（土）午後 （約2時間）	・自分の意見を発表したり、友だちと相談したりする。	・ジョイピョンチームの仲間と一緒にやってみよう遊びを決める。
第4回	2017年 11月11日（土）午後 （約2時間）	・ジョイピョンチームの仲間と協力する。	・司会の原稿を作ったり、秘密基地を作ったり、前回決めた遊びを実行するために、それぞれ与えられた役割について準備を進める。
第5回	2018年 12月10日（土）午後 （約2時間）	・自分の同胞について考える機会をもつ。 ・同胞に対する素直な気持ちを表現する。	・「きょうだい児（同胞）に対してイライラすること」というテーマで、ワークシートに各自でイライラすることを記入する。 ・一人につき、一つエピソードを発表する。
第6回	2018年 2月17日（土）後 （約2時間）	・仲間と過ごした思い出を振り返り、思い出を共有する。	・1年を通して、楽しかったエピソードを発表する。 ・1枚の模造紙に、それぞれが楽しかったことや印象深かったことを、絵や文字で書き表す。 ・出来上がったものを見て、それぞれのエピソードについて語ったり思い出したりする。

のではなく、にこやかであったし、家族全員での遊びや、きょうだい児と同胞とのクッキングの際のA児と同胞との関わりを観察していても、お世話をしたり、一緒に活動したりする場面もあれば、適度に距離を置いている場面もあり、お互いに心地よい距離感での関係を築けていると感じた。

また、ジョイピョングループでの活動の場面において、ワークシート上や支援者との対話の中で、同胞に対する不愉快な気持ちを素直に表現していることから、A児にとってジョイピョンクラブという場所が、自分の本当の気持ちを表出でき、受け止めてもらえる場所となってきたことが推察される。さらに、A児は数年続けて参加していることから、支援者との信頼関係も密になってきていた。A児のように、継続的に同じ支援者と関わり、その中で会話をしたり、一緒に遊んだりする経験を積み重ねることが、参加しているきょうだい児の安心感につながっていると考えられる。

## II-2. 同胞対象

活動名：ジョイケログループ

主な対象者：障害のある幼児童

主な支援者：太田千裕（県立高岡支援学校 教諭）他  
「パイロットクラブ」 富山大学学生（都度、必要な人数を配置）

平均的な人数：7家族から約5名

プログラム内容：活動は2部構成で、前半はジョイケログループのみでゲームや工作に取り組み、後半はジョイピョングループとともに調理活動を行った。

前半のゲームや工作の内容は毎回変わるが、保護者やきょうだい児の活動を保障するため「次回もジョイピョンクラブに来たくなる内容」であること、グループ意識が芽生えるように「友達の活動の様子を見ることのできる内容」であることを目標に活動を考えるようにした。概要については、実施プログラムを以下に示す。（表3）

表3 ジョイケロ（同胞対象）の年間活動（2017年度）

	実施日	内容	支援や配慮事項
第1回	2017年 6月3日（土）午後 （約2時間）	①魚釣りゲーム ・思い思いに好きな魚を釣る。 ・個数や時間を決めて釣る。 ②ジョイケロの出席簿作り ・好きな色の画用紙に、表紙や出席カードなどを貼る。 ・今日の活動内容カードを貼る。	・時間を決めて行うが、次の活動に移ることが難しい場合は、徐々に工作に移るようにする。 ・台紙の画用紙の色や出席カードのイラストを変えて用意して、オリジナルの出席簿を作るよう促すようにする。

第2回	2017年 8月26日(土)午後 (約2時間)	①チューブプレーン作り ・手順に沿って作る。 ・飛ばして遊ぶ。 ②ミニ夏祭り (空気砲、おやつ釣り、千本引き) ・3つのコーナーを周って、スイカ割りチケットをゲットする。	・作り方の見本を示すとともに、難しいところについて学生に手助けを求める見本も示す。 ・モデルになれる子供からはじめて、難しい場合は手を添えて一緒に行く。
第3回	2017年 12月10日(日)午後 (約2時間)	①絵本の読み聞かせ ・クリスマスに関する絵本の読み聞かせを聞く。 ②コーンハット作り ・サンタクロースの顔描く ・組み立てる	・対象年齢が3から6歳程度の絵本を選ぶようにする。 ・きょうだい児のぶんも作ってプレゼントすることを伝えてから活動を始めるようにする。
第4回	2018年 2月17日(土)午後 (約2時間)	①動物を捕まえるゲーム ・黒板に貼ってある紙袋の動物に向かってボールを投げる。 ・タイマーが鳴るまでボールを投げ、落とした動物を数える。 ②ひな祭り工作 ・お内裏様とお雛様の髪型や目、口、装飾品を選んでおせんべいの袋に貼る。	・順位はあえて発表せず、得点表に花丸シールを貼って評価とするようにする。 ・ボール拾いの手伝いなど、動く機会をたくさん作るようにする。 ・きょうだい児のぶんも作ってプレゼントすることを伝えてから活動を始めるようにする。

#### 実施結果：

第1回目は自分が釣った魚の種類や数にばかり注目していたジョイケログループの子供たちだったが、第4回目では友達の応援をしたり、「お助けマン」と言って友達のボールを拾う手伝いをしたりするなど、グループの友達と関わりあって活動する姿が見られるようになった。支援者や学生が間に入り、友達の良いところを伝えたり一緒に応援するよう促したりすることで、年に数回会う同じグループの友達と楽しく過ごすことができた。

また、子供たちの落ち着いた様子に、保護者も安心して、グループの話し合いや自分の考えを深めることに取り組むことができたようだった。それぞれの活動の後、子供たちを迎えに来る保護者は、充実した表情で子供たちの活動している教室に入ってきて、工作で作ったものを見せたり楽しかったことを話したりする子供たちに笑顔で接していた。

2017年度は、後半の2回に、ジョイケロの子供たちがきょうだい児のぶんもコーンハットやひな祭りグッズを作る活動を設定し、取り組んだ。きょうだい児との関係をより良好にしてほしいという意図もあったが、きょうだい児の学習のプログラムに、『自分を支えてくれる人』という内容があることを受けて、工作をとおして、「ジョイケロの先生もきょうだい児たちのことを考えて

いるよ」というメッセージを伝えられればと考えた。ジョイケロの子供たちは、「○○ちゃんにあげるよ」と張り切っていたが、実際にきょうだい児に渡したのか、渡されたきょうだい児の反応はどうだったのかについての確認はしていない。3つのグループの活動がそれぞれ独立してあるのではなく、関係しあって家族を支援することができるようなプログラムを作ることが今後の課題である。

#### Ⅱ - 3. 保護者対象

活動名：ジョイワングループ

主な対象者：障害のある幼児児童の保護者

主な支援者：神名昌子（県立しらとり支援学校 教諭）

ほか 富山大学学生 約2名

平均的な人数：7家族から約9名

プログラム内容：障害のある子供のきょうだい児の子育てに関して、年間4回のプログラムを実施してきた。内容は本稿が対象とする3年間においてそれほど変化をしていない。いろいろな家族とのふれあいや意見交換などを通して、保護者自身のきょうだい児に対する関わり方を見つめ直してもらい、自分のふるまいに自信をもって子育てしてほしいと願い、応援する目的で取り組んできた。プログラムの概要については、表4に示すとおりで

表4 ジョイワン（保護者対象）の年間活動（2017年度）

	実施日	目的	内容
第1回	2017年 6月3日(土) 14:15～15:25	・簡単なゲームや、自己紹介、このセミナーに期待するものを互いに聞き合うことを通して互いに親近感をもつことができる。	○自己紹介 ・子育ての楽しみ ・気を付けていること ・不安な事や悩み事 ・セミナーに参加した理由  ※昨年度、同じ質問に回答した自分との比較を試みる。

きょうだい児支援のあり方

第2回	2017年 8月26日(土) 14:00～15:50	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習会をとおして、先輩保護者との意見交換や外部講師の講話を聴き、自分自身やきょうだい児とのこれまでの関わり方を見つめ直し、今後の生活に生かそうとすることができる。</li> </ul>	<p>○学習会 『きょうだい児』のこと、いろいろ話してみよう』 講師 同志社大学社会学部社会福祉学科 松本 理沙 先生</p> <p>1 トークタイム ※先輩保護者によるきょうだい児の子育てについて、子育てのよりどころや自分自身の変化などについてのトークタイム</p> <p>2 質問タイム ※フロアとの自由な意見交換 ※松本先生には、研究者としてだけでなく、きょうだい児ご自身としてのご意見をお話ししていただく。</p> <p>3 松本先生より助言</p>
第3回	2017年 12月10日(日) 14:00～15:50	<ul style="list-style-type: none"> <li>・同胞に関するきょうだい児の不満や不公平感に対して、自分自身に置き換えて考え、ロールプレイをすることができる。</li> <li>・互いの考えを聞き合うことで、いろいろな考え方や対応の仕方があることを知る。</li> </ul>	<p>○「あなただったら、どうする？」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・きょうだい児に関する3事例について、説明する。</li> <li>・ふせんに自分の対応をセリフにして書く。</li> <li>・互いに役割を決め、ロールプレイをしたり、意見交換をしたりする。</li> </ul>
第4回	2018年 2月17日(土) 14:00～15:00  ※参加予定家族がインフルエンザ罹患のため、実施できなかった。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「〇年後のわが家」を想像し、自分や家族の姿、支えてくれる人について考え、書き出すことを通して、未来の自分の暮らしに夢や希望をもつ。</li> </ul>	<p>○「〇年後のわが家」について想像して、発表しよう</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ワークシートに〇年後を想定し、自分自身や家族の未来について想像する。</li> <li>・「〇〇になっていたらいいな」という肯定的な考え方で想像する。</li> <li>・自分や家族を支えてくれる人についても考える。</li> <li>・イラストやふきだしを使って、自由に作成する。</li> <li>・発表では、互いの「すてきなところ」を見つけ、感想を伝え合う。</li> </ul>

ある。

実施結果：

富山大学を中心に始まったきょうだい児支援「ジョイジョイクラブ」の取組は、「手をつなぐ育成会」や「パイロットクラブ」のご協力をいただきながら、じわじわとその取組の大切さが浸透してきているように感じる。その中でも、ジョイワングループの取組は、保護者自身に焦点を当てた活動を行ってきた。

参加保護者のうち、継続して参加している保護者は、テーマに沿って自分の考えを整理して話す活動を通して、自分自身の行動を見直したり、子育てにおける同胞やきょうだい児との関わり方にも変化が見られたりした。活動時に取得した保護者へのアンケートの記述には、これまで障害のある子供(同胞)に関する取組は多くあったが、そのきょうだい児に対する取組はほとんどなかった。新しい視点できょうだい児たちと関わる大切さを知ったという意見があった。そして、他の家族との関わりを通して、自分の抱える悩みは自分だけが抱くものでなく、同じ立場の保護者同士共感できるものであることも保護者を元気づける一因となったと思われる。

きょうだい児の成長に不安を感じている保護者も多く、成長に伴う悩み事にどう対処していったらいいかについてはずっと「悩み」として在り続けると思われるが、最終回プログラムでは、家族の将来について想像し、「〇

年後には、うちは～～になったらいいな。」という保護者の夢や希望をシートに作成して語ってもらうこととした。将来について前向きに考え、自分自身のこと、きょうだい児のこと、障害のある子供(同胞)のことについて、制作活動を楽しみながら、なおかつ自分自身や家族について視点を変えて眺めることで、客観的に家族を見つめることができ、笑顔で他者に語る様子が多く見られた。夢や希望について、あれこれと思いをめぐらせてシートを制作することは、ほんのわずか一時でも保護者を笑顔にし、元気づけることが分かった。このプログラムは毎回最終回に取り入れることが望ましいプログラムであると思われる。

Ⅲ. 成果と課題

上述のように、当ジョイジョイクラブの活動は大学外部の現職教員の支えにより成り立っている。きょうだい児だけでなく、その同胞や保護者との活動を通じて、包括的に支える実践である。現職教員らの現場および当授業での経験や自己研鑽などを基にした活動が生まれ、積み上げられている。それらの献身的なサポートなくしては、同様の活動を維持していくことは困難である。きょうだい児とその家族を対象にしているために内容が多様であり、参加家族数によっては規模が大きくなる運営の

難しさもあるが、やはり理論や経験を踏まえた実践がそれぞれのグループの活動で展開されるからであり、初学年の学生にとって掛け替えのない学びとなっているからである。

実例として2017年度のプログラムを掲載したが、その前の2年間の取り組みとそれを踏まえた改善や工夫、また成長・変化するきょうだい児とその家族への配慮がある。次の展開を考えながら支援が継続される中で、ジョイジョイクラブの社会的認知が広まり、活動の重要性が伝えられていく。地域に根差した活動とするために、捉えられる課題の一つひとつに取り組んでいくことがなお必要である。

「子どもとのふれあい体験」にある程度共通していると思われるのは、外部機関や施設が提供する事業や取り組みに学生が参加するものでない場合、平日ではなく土日など学校が休みの日に行くことが多く必要になることである。平日では学生の授業時間後に3～4時間を割くことは難しく、活動（授業）の準備や事後の振り返りをその日のうちにと考えれば実際にはもっと時間がかかるので、どうしても休日の時間の余裕を含んだ日程を組む必要がある。

当ジョイジョイクラブの場合、上述のように、大学外の現職教員のサポートを得るため、本学の授業のために出張依頼をしていることから、休日実施は時間外労働（休日労働）を求めていることも意味する。もっとも協力を強制することはなく、進んでかかわっていただいているものであるが、昨今の教員の多忙、また働き方の見直しを考えると、ご厚意に依存している現状は適切といえない。一方で、上述のように協力なしには成り立たないというジレンマ状況にある。直ちに解消するのが難しい問題であるものの、月一回のペースでの実施を、隔月実施で行うなどの配慮は必要である。その場合、年間では6回程度の実施となりうるが、年間の活動を「60時間以上にする」授業要件を満たすために、1回の実施にかかる準備および振り返りを含む「授業時間」を10時間程度にする必要が生じるので、これまでの活動（授業）を見直し、平日に基礎知識を得る学習の機会を加え、学生の授業参加意欲を維持するための工夫も必要になると思われる。

上述の各活動の実施結果（振り返り）の中でも言及されていたが、3つのグループに分かれての活動を関連付け相乗の効果を上げていくことの模索や成長するきょうだい児・同胞ら子どもたちに寄り添う支援が必要になっている。特に成長したきょうだい児が他に拠り所を得られるようになり、参加率が下がっても、時に「居場所」としての受容性を期待して（再び）やって来ることが可能にするためには、継続的支援を備えるものとして、授業から離れても相談を受け、窓口対応できるようにすることも重要と思われる。

また、当初からの課題として、授業であることの限界

がある。その中でもとりわけ検討が必要と考えられるのは、子供たちの成長に1年を超えて寄り添う体制である。1年間の通年授業として子供らの「1年の成長」をみることを学びの要点にあげてはいるものの、当該年度の授業を終えた学生が引き続きかわるかは任意であるため、1年だけ授業として関わった学生にとっては、子供たちの数年にわたる成長＝変化は明らかではなく、子供たちの立場で考えると継続的な支援が保障できていない。このことはNPO組織などで核となる一定のメンバーが継続的な活動を行う例と比較すると、授業として行うことの弱点・限界ではないかと考えられる。例えば、参加している子らが「ジョイピョン（きょうだい児）とジョイケロ（同胞）の違いって何？」と素朴な疑問を呈した時にどう向き合うかなどの潜在的な課題がある。本来、きょうだい児らの成長に合わせて長期的に解決すべきものである。実態として、どの時点でも子供らから呈示されうると認識しつつも、活動としては、1年ごとの授業として成り立つように考えるにとどまり、対象児ごとの成長記録やエピソードを引き継いだり、活動全体の振り返りを行うなど、きょうだい児らの成長や変化に丁寧に寄り添うという形にはなりにくいのが本稿の対象とする3年間で見いだされたことである。

#### Ⅳ. おわりに

本稿では過去3年間のジョイジョイクラブの活動を振り返り実践記録を示した。詳細については各活動を主導されている先生方による論考で今後議論するものとし、授業（活動）の記録を残し今後の展開や類似の取り組みの参考となるものとした。本稿の主旨からは外れるが、授業としては学生のためにある一方で、継続した活動としてはこの富山で成長していくきょうだい児（とその家族）のためにある。様々な事情で中断したり途絶したりすることが避けられないとしても、本稿を一つの参考にして授業や活動が展開されることがあれば書き残す意義がある。

授業を履修した学生のきょうだい児にとってのジョイジョイクラブが提供することの理解には、同じような境遇にある子供同士が集う居心地の良さがこの活動にはあるというものがあるが、対象児が成長し、小学高学年や中学生になるころに参加しなくなる場合もあることを考えると、「その後」のきょうだい児らが「時間・場所・関係」をどのように得ている（補っている）のかはわからず、潜在的な課題と感じられる。その課題の解明を考えた時、一つの模索は活動を通じて広く社会性を得ていくことへの支援である。種々の活動にできるだけ多くの「地域の人」に関わってもらい地域の中の理解者を増やすことで、地域にジョイジョイクラブのような存在を見つけ易くなるのではないか。こうした課題への取り組みについて、批判を受け止めつつよりよい活動をめざした

い。

本稿では授業としての内容の検討等は別稿にゆだねるが、きょうだい児支援の一実践として、同様の支援活動を行う参考になれば幸いである。

## 謝辞

ジョイジョイクラブの活動に多大なご支援・ご協力を下さる富山市手をつなぐ育成会、富山パイロットクラブの皆様に、改めて感謝申し上げます。

## 参考文献

白鳥めぐみ, 諏方智広 他: きょうだい 障害のある家族との道のり, 中央法規, 2010年  
瀧本優子, 吉田悦規: わかりやすい発達障がい・知的障

がいのSST実践マニュアル, 中央法規, 2011年  
辻井正次: 家族と子どもを支える発達障害のある子の育ちの支援, 中央法規, 2016年

## 〔注 / Annotation〕

---

<sup>1</sup> 第54回特殊教育学会自主研究集会「家族支援の視点から 障害のある子どものきょうだい児支援を考える (5) — ライフステージに応じた支援: 児童期から青年期まで —」(2016年9月17日~19日, 新潟県朱鷺メッセ)における質疑応答での指摘。

(2018年8月31日受付)

(2018年10月3日受理)